



Title	「現場力」ノオト(2010年・秋)
Author(s)	西村, ユミ; 西川, 勝; 池田, 光穂 他
Citation	Communication-Design. 2011, 4, p. 87-100
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9204
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「現場力」ノオト（2010年・秋）

西村ユミ（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD）

西川勝（大阪大学CSCD）

池田光穂（大阪大学CSCD）

高橋綾（大阪大学CSCD招へい教員）

樫本直樹（大阪大学CSCD招へい研究員）

本間直樹（大阪大学CSCD／大阪大学大学院文学研究科）

安田伸行（介護職）

小林恭（大阪大学CSCD）

“Genba-Ryoku” Note (Fall 2010)

Yumi Nishimura (Center for the Study of Communication-Design: CSCD, Osaka University)

Masaru Nishikawa (CSCD, Osaka University)

Mitsuhiko Ikeda (CSCD, Osaka University)

Aya Takahashi (Visiting Academic Staff, CSCD, Osaka University)

Naoki Kashimoto (Visiting Researcher, CSCD, Osaka University)

Naoki Homma (CSCD / Graduate School of Letters, Osaka University)

Nobuyuki Yasuda (Caregiver)

Kyo Kobayashi (CSCD, Osaka University)

抄録

「現場力研究会」を開催して4年半（開催回数106回）になった。「現場力」ノオト（2010年・秋）は、この研究会での議論をもとに、参加者一人ひとりが関与している多様な「現場」、そこでの出来事や特徴、テーマやそれらを理解するための概念を取り上げたものである。本稿では、2008年度後半から2010年度前半の研究会における議論から編み出された、12編の気になる現場の事象やその論点を紹介する。

キーワード

現場力、参加、経験

Genba-Ryoku (Empowerment faculty and sensibility in practice), participation, experiences

まえがき

現場には、はっきり意識されないままに埋め込まれていることが沢山ある。見逃してしまうかもしれない気づき難い営みがある。既に知っているのに、それを言語化しようとすると言葉に詰まる実践もある。それらを丁寧に見つめ直したり、論点を整理し直したりすることで、はっきり見えなかつたことが浮かび上がってくるかもしれない。また、現場を反省的に捉え直すために必要とされる視点や理論、概念がある。その吟味は、現場を別様の切り口から照らし出すことを可能にし、現場を見る学び直す視点を提供してくれるだろう。本稿は、「現場力研究会」¹⁾での議論をもとに、こうした現場の営みや概念を、一人ひとりの参加者がじっくり考えて綴った「ノオト」である。

1) http://www.csed.osaka-u.ac.jp/user/roaldo/Genba_ryoku.html (2010年9月29日)

これまで「『現場力』研究術語集」として、『Communication-Design』の0~2号に、幾つかの術語を著してきた。0号（西村他 [2007]）では、「学習の場としての実践現場」「参加の概念」「私の実践コミュニティ」「「わざ」の習得」「アイデンティフィケーション（Identification）」「メティス（策略知）」「表面の経験」「アクティブ・タッチ（Active Touch）」「協働的実践（Collaborative Practice）」の9術語、1号（西村他 [2008]）では、「問題にもとづく学習」「学習のコンテクストの学習」「活動の拡張としての学習」「経験の直接性に含み込まれた他者の経験」「道具を使う」「エージェンシー（Agency、行為者性）」「埋め込み（Embeddedness）」「改善（KAIZEN）活動」「協働システムと組織」の9術語の記述を試みた。2号（西村他 [2009]）では、「反省的実践」「装置（dispositifs）」「状況に埋め込まれた行為」「インスクリプション（inscription）」「芸術パフォーマンスにおける即興」「当事者」「復興コミュニティビジネス」「「つたなさ」のテクノロジー」の8術語を提案した。これらの述語は、意味の固定を急いで提案されたのではなく、具体的な現場で使用され再検討されて、それを通じて現場の見え方や理解の切り口が別様に見えてくる可能性があると考えて著された。

本稿では、2008年度後半から2010年度前半の研究会における議論から編み出された、12編の気になる現場の事象や言葉、その論点を紹介する。この間私たちは、『省察的実践とは何か？』（ドナルド・ショーン著）、『動く知フロネシス』（塚本明子著）、『ケア：その思想と実践』（上野千鶴子他編）、『いじめ：学級の人間学』（菅野盾樹著）などを読み進めてきた。さらに、木村敏の「臨床哲学」、鶴見俊輔の「コミュニケーション」、Community-Based Participatory Research (CBPR)、研究会メンバーが携わっている具体的な現場での取り組み——犬島アート活動、介護現場の実践、認知症ケアの現場、看護実践とその経験等なども報告された。

またこの間には、新たなメンバーがたくさん加わり、具体的な現場の課題や現場を見る視点が提案された。どれも現場では確かに見えている（経験されている）、けれども言葉にし難い重要な視点ばかりだ。こうした参加者一人ひとりの経験を見落とさずに拾い上げ、その経験に合ったスタイルでゆるやかに記述することを目指して、本稿から、「『現場力』研究術語集」を「現場力ノオト」に改名した。ここで取り上げた内容が、現場において使用され再検討され、新たな視点から現場を照らし出し、同時に現場に組み込まれていくことを期待する。

- 西村ユミ・本間直樹・志賀玲子・鳥海直美・池田光穂・伊藤京子・工藤直志・西川勝・仲谷美江・渥美公秀（2007）「『現場力』研究術語集」『Communication-Design 2006：異なる分野・文化・フィールド—人と人のつながりをデザインする』大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：215–229.
- 西村ユミ・本間直樹・志賀玲子・池田光穂・工藤直志・高橋綾・仲谷美江・山崎吾郎・西川勝（2008）「『現場力』研究術語集（第2報）」『Communication-Design 1：異なる分野・文化・フィールド—人と人のつながりをデザインする』大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：203–216.
- 西村ユミ・志賀玲子・池田光穂・山崎吾郎・仲谷美江・本間直樹・高橋綾・菅磨志穂・西川勝・松本篤（2009）「『現場力』研究術語集（第3報）」『Communication-Design 2：異なる分野・文化・フィールド—人と人のつながりをデザインする』大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：189–201.
(西村ユミ)

1. 声の記述

20数年間、ぼくは看護記録や介護記録を書き続けてきた。しかし、肝心なことは書き損じてきた、という気持ちが強い。なにが書けなかったのか。ケアの証拠のために記録をしても、ケアを記述してこなかった。ケアの現場には、さまざまな声が交錯する。その声に促され、励まされ、問い合わせられて、ケアは展開する。それなのに、記録においては、それぞれに異なる肌理をもったあの声、この声は、どこにいったのか。ぼくに届いたはずの声の生気は、意味内容を固定する文字の羅列の隙間から蒸発してしまうのだ。

とりあえずケアをする立場としては、ケアされる人から「ありがとう」「ありがとうございました」という言葉を何度も聞く。しかし、それはほとんど記録されることはない。わずかに記録されても、読む者に何が伝わるのだろうか。諦めと気恥ずかしさが、届けられたはずの「ありがとう」をなかったものにしてしまう。ケアを成就させる「ありがとう」の声が記述できない。

声は、身体から発せられる。伏し目がちにつぶやく「ありがとう」、喘ぐ息をのむ「ありがとう」、眼を丸めての「ありがとう」、両手を振っての「ありがとう」、柔らかな口元からこぼれる「ありがとう」、あれこれ。

声には、手ざわりがある。かすれた声、張りのある声、しめた声、硬い声、冷たい声、煮えたぎる声、柔らかな声、鋭い声、震える声、あれこれ。

声は言葉を越境する。笑い声、泣き声、叫び声、鼻声、ためいき、あくび、あれこれ。

声は、人と人の間に響く。長すぎる沈黙を破る「ありがとう」、まっすぐに届けられる「ありがとう」、ジグザグする「ありがとう」、行き場をなくした「ありがとう」、響き合う「ありがとう」、あれこれ。

その場限りで消えてしまう声、そのとき誰かに向けられた声は、たとえ録音しても再現できない。客観的再現を拒む本性を声は身にまとっている。それを何とかしたい。文章として容易には描くがない形をあたえたいという欲望が、ケアする者の内側から噴き出してくる。声に呼ばれて、その声に共振した身体から、声を文字へと引きはがして、他者に提示したいという欲望である。

声を記述するというアポリアに、ケアの現場はどう応していくのか。声の原初性としての呼びかけ、声は次の声を呼ぶばかりである。声を記述する際に失うことの大きさを自覚する道だけは開けている。身もだえする記述にこそ、声はふさわしい。

(西川勝)

2. 後知恵

阪神電車の武庫川駅を降りるとすぐに、ハゼの釣れるポイントがある。梅田の駅で買った釣り新聞を見て、ぼくは武庫川駅を手ぶらで降りた。急に予定を変更したのだ。

しばらく、釣りの様子を眺めていたが、ぼくは無性にハゼ釣りがしたくなった。近くの釣り道具屋で、安物の竿とハゼ釣りの仕掛けとエサを買った。生まれて初めてハゼを釣るのである。店の主人は「はじめてでも大丈夫、ハゼはようさんおります。」といって、買ったばかりの竿に仕掛けをセットしてくれた。あとは、針にエサをつけて川に投げ込むだけであった。ぼくはイシゴカイを針先に引っかけて、釣りはじめた。何かが川の中のエサを突っつくような感覚が糸と竿を伝わって、ぼくの手のひらにやってくる。「これだ」と思い、急いで竿をあげるがハゼの姿はない。胸の鼓動にあわせるように、何度も竿を引き上げるのだが、獲物はない。ハゼを針に掛けるタイミングが悪いのだろう。早くしたり遅くしたり、強くしたり弱くしたり、いろいろ工夫するが駄目だった。その日は、ハゼに惨敗であった。

数日後、ぼくは妻を同伴してハゼ釣りに再挑戦した。彼女は早速、近くにいた釣り人にハゼ釣りのコツを尋ねている。そして、ぼくに言った。「エサの長さが違うのよ。ちぎって短くしないと駄目みたい。」そうか、それでエサばかり取られていたんだ。まるで自分が秘技をひらめいたような気分になって、ぼくはエサを短くしてみた。あっという間に、小さなハゼが釣れた。嬉しかった。

これは「後知恵」に違いない。「後知恵」は、物事が終わってしまってから出てくる妙案をいう。つまり、この場合は、さんざん釣れなかった後で、エサが長すぎたことを、その原因として知ることである。しかし、最初から人に教えてもらって「先知恵」でハゼを釣っていたとしたら、自分の失敗について、こんなにも深く納得したであろうか。そうは思えない。愚かな者は、必要なときには知恵も出ずに、結果が出た後になってようやく「後知恵」に気づくという。しかし、本来、万能の先知恵を持っていない人間は、生きる現場の最中では、悲しいまでの試行錯誤を強いられる。この試練を無駄にしないためにも、愚者の愚者たる自覚を促しながら、この先の豊かな実りを約束する贈り物として「後知恵」を授かるのだ。考えてみれば、人間の文明や、社会の文化伝統の実質は、この「後知恵」の集積と継承なのだ。

(西川勝)

3. 感情労働

感情労働（emotional labor）とは、相手（=顧客）に対して特定の精神状態を創り出すために、労働者の感情を誘発したり、逆に抑圧したりすることが賃労働の職務課題になる、精神と感情の協調作業を基調とする「労働」のことである。やさしく言えば「お金儲けのために作り笑いや所作を雇用主から要求される労働」のことである。

この用語は、社会学者A・R・ホックシールド [2000] によって最初に提唱された。感情労働の典型は、航空機における白人女性の客室乗務員の勤務様態であるが、現在では、ファーストフードの販売担当者や企業のクレーム処理担当者など、さまざまな生活の局面で感情労働に従事する人たちを観察することができる。臨床ケアの専門家もまた対人交渉の相手が存在する前では感情労働を強いられる。しかしそれは専門家だけに限られた仕事だろうか？ 未知の人を相手に交渉を始める誰もが作り笑いや所作をするように、私たちの日常生活の中でも「感情に関するワーク＝仕事（emotional work）」は、誰しもが身に附いている作法のひとつである。ただし、ここで注意したいのは、議論の中心にあるのは無償の仕事ではなく、有償の労働との区分とそれらの間の差異の考察にある。

感情労働が理論的に提起するものは、労働力商品として感情を表出したり制御したりすることが労働者に要求されているがゆえに、日常生活の「普通」の感情表出が阻害（疎外でもある）される可能性があることである。これは、マルクスの疎外労働論が基調にあり、家族や友愛にもとづく親密圏において〈使用価値〉をもつ「感情」が、賃労働（=働くで給料を得ること）において売り渡しの対象になる、つまり〈交換価値〉を持たされたままでよいのかという問題を提起する。

臨床ケアの実践の現場において感情労働はどのように考えられているか？ その議論の多くは、「現場力」の効用を説く人々は感情労働を特定の職業や女性というジェンダーに関連づけられる、余計な介在物あるいは障害と理解している。他方、ミクロな相互作用に着目する社会学者であれば、先のように人間の基本的行動のレパートリーである「感情に関するワーク」が強いられた「仕事」になることは憂慮すべき問題であるが、行為主体の感情の操作は、現場で人間関係を円滑に、かつ現場の協働を助けることもあり、それを安易に放棄すべきではないと助言するだろう。感情労働の議論を普遍的一般的である定言的な命題とするのではなく、そう呼ばれる臨床の現場に臨むより厚い記述が今求められている。

ホックシールド、A. R. (2000)、石川准・室伏亜希（訳）(1983)『管理される心：感情が商品になる時』
世界思想社。

(池田光穂)

4. 状況的学習と最近接発達領域

ここでは、わかる（=できる）ことを学習と定義してみよう。学習についての古典的理解は、外部表象化された〈知識〉や〈技能〉を学習者個人の内部に取り込むというメタファーでしばしば表現されてきた。例えば「計算のやり方を覚えた」「ろくろを上手に回すことができるようになった」という喻えなどがそれである。

それに対して、社会的活動に参与することを通して学ばれる知識と技能の習得のことを、状況的学習 (situated learning) という。この学習は「協働の企て (joint enterprise)」の過程の産物である。この用語と概念は、人工知能研究者ジーン・レイヴと人類学者エチエンヌ・ウェンガーの英文の同名の書籍『状況に埋め込まれた学習』 [1991] によって提唱された。現場を成り立たせる構成主体によって状況的学習が成立するための場を実践コミュニティ（実践共同体）と呼ぶ。実践コミュニティでは、行為者がみんな（=他者と自己）と共に恒常的に参与する。それゆえ、これは私たちが理解する「現場」であると考えても、ほぼ差し支えない。

社会的活動に参加することの最たる経験とは、みんなで一緒におこなうことである。私たちは (a) 他者の助けなしにひとりで学習することと、(b) 個人的に教えてもらわなくても、みんなとの共同作業のなかで学習することがある。後者 (b) の状況の中には前者 (a) の経験が含まれるために、みんなとの関係においてできる行為の水準あるいは領域 (b-a) があることがわかる。ロシアの心理学者レフ・ヴィゴツキー [2001] はこの領域を最近接発達領域 (Zone of Proximal Development, ZPD) と呼んだ。

ウィリアム・ハンクスが的確に指摘するように「学習を命題的知識の獲得と定義するのではなく、レイヴとウェンガーは学習を特定のタイプの社会的共同的参加という状況の中におく。学習にどのような認知過程と概念的構造が含まれるかを問うかわりに、彼らはどのような社会的関わり合いが学習の生起する適切な文脈を提供するのかを問う」た (ハンクス [1993: 7])。その意味では、この文脈はZPDとほぼ重なるとみてよい。

実践コミュニティのメンバーになることは「参加の概念」（池田 [2007]）で説明され、状況的学習の場合、その過程の最初の段階を正統的周辺参加 (Legitimate Peripheral Participation, LPP) と呼ぶ。実践コミュニティへの参加は、状況的学習の深度により LPP から十全参加に移行すると『状況に埋め込まれた学習』では主張されているが、それらの過程は、現場における行為者の「現場力」の習得と比較され、今後さらに検討される必要がある。

ハンクス、ウィリアム F. (1991) 「序文」 レイヴ、J. & ウェンガー、E. (著)、佐伯胖 (訳) (1993) 『状況に埋め込まれた学習』 産業図書 : 5-20.

池田光穂 (2007) 「参加の概念」 『Communication-Design 2007』 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター : 221.

レイヴ、J. & ウェンガー、E. (1991)、佐伯胖 (訳) (1993) 『状況に埋め込まれた学習』 産業図書。ヴィゴツキー (2001)、柴田義松 (訳) 『思考と言語』 新読書社。

(池田光穂)

5. 障害を笑う（其の一）

笑芸をみてしらぬ顔をしたり、眉をひそめたりする人間の内面生活は案外に空虚なものである。私など、他人と関わる際にはいかに相手を笑わすかを考えること専らであるため、ろくに相手の話を聞いていないことなどしばしばである。私のこのさもしいまでの芸人根性を、人は関西出身者のそれと一緒に付すかもしれない。しかし私にとっては多くの関西人同様—自分のそれがローカルなエトス扱いされることなど心外であり、むしろ普遍化可能な主義と呼んでいただきたいものだと考えている。

私は常々「障害を笑う」ことを主張し、時にはそうした笑芸を披露することもあるが、それを見るよりも前に「あなたは障害の当事者ではないのに、どうしてそれをしようとするのか」と聞く人がいる。どうやらこの人が当事者でないとみなす私が、障害をネタに笑いをとろうとすることは、不可解であるばかりか不謹慎だということらしい。逆に障害の当事者が笑芸を披露する際には「障害を持つ人のことは笑えない」という頑なな反応が観客のなかに見られると聞く。障害を笑うことには多くの障害、と韻を踏んでみたところで、それこそ、かのヴァレリイ氏も微笑すら浮かべまい。

こと障害をネタにしたものに関しては、その笑芸が実際に面白いかどうかという次元とは別のところで、笑えない、笑うべきではないと決されることがある。そしてその判断は、当事者であるかということに大きく関わっている。しかし、私には、障害を笑うという実践が行おうとしているのは、まさしくこの「誰が障害の当事者か」という問いを超えていくことではないかと思われる。

笑えない、笑うべきでないという人々が、戸惑い立ちすくみながらどんな風景を見ているのか私は知っている。彼らが目にしてるのは、向こう岸に笑われる障害の当事者が、こちらの岸に笑われる人ではない、障害を持たない自分がおり、そしてその間にルビコンやイムジンに比せられる大河の横たわる光景である。舟を出したて渡ることができるはずもなく、そもそもこの輩には渡る気もない。笑いの神、あるいは芸人が誘うのは、この川を渡ること、否、川に分断された二つの岸という空虚な仮象とは異なるもう一つの世界なのである。笑いとは、当事者の自嘲やへつらい、それが生み出す非当事者からの同情ではなく、それらを超えていこうとする情動の蠢きである。（続）

参考文献（ネタ元）

九鬼周造（1991）「偶然の生み出す駄洒落」『九鬼周造全集 第五卷』岩波書店。

（高橋綾）

6. ともに考えることとパターナリズム

問題をかかえた人や何らかの現場とのかかわり、あるいは、そうした人や場にどのようにかかわればよいのかを考えるとき、いつも「パターナリズム」という言葉が頭をよぎる。

以前、エコツーリズムの調査のために、数回沖縄に行ったことがある（注）。エコツーリズムの実践を巡って、自然保護、観光振興、地域振興などの利害の対立する「生」の現場にかかわってみたかった。後からふり返ってみると、正直、問題の核にも入れなかつたし、その人たちの間でどのように振る舞つていいのかがよくわからなかつた。しかしながら、なんとなくだが「部外者もかかわつていいのだ」ということはわかつた。ただ、そのかかわりを後押しする理屈が必要にも感じた。そして、その理屈の一つがパターナリズムであるように思われる。

確かに、問題の中心にいるのは、問題をかかえた人であり、その当事者たちである。そして、そうした問題の現場に私たちのような部外者がかかわるのは、自分たちがかかわることが、その問題をよりよい方向に導くことができる、あるいはその役に立ちたいと考えるからだ。それゆえ、そうした人たちと問題を考える場面においては、彼らにとって最善の判断ができるよう、こちらの考えを差し挟んでいくことになる。しかし、ここには明らかにこちらの方が正しく思考でき、相手はできないという「みなし」が前提となってしまっている。では、どう考えればよいのか。

一般的に、パターナリズムは、相手の自律（自己決定）への介入・干渉を意味するために評判が悪く、相手が「まともでない」場合に限って、パターナリズムは許容できると言われる。確かに、明らかに誤った判断をしているのに、それは現場の人たちが決めしたことだから、というのは単なる無責任である。その意味でパターナリズムは認められるかもしれない。

しかしながら、現場の人たちが決めたこと、イコール正しい結論であるとは限らないということもある。ということは、相手が「まとも」であったとしても、よりよい結論にむけて、自覚的に介入することがあってもいいし、必要な場面はあるということにならないだろうか。そもそも、パターナリズム、あるいは先に触れた「みなし」抜きのかかわりということがあり得るのだろうか。

問題の現場で、そこにいる人びとと直接的な当事者ではない人が「ともに考える」ことを可能にするためにも、まずは一般的な理解から離れて、パターナリズムの可能性を探ってみる必要があると思われる。

(注)

この調査研究のために、大阪大学グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文科学国際研究教育拠点」平成19、20年度大学院生調査研究助成を受けた。

(櫻本直樹)

7

● 障害のある身体が踊り出すとき

いつものように車椅子に乗った彼女は、周囲で騒めきはじめた青銅の打音につつかれて、涎を垂らしながらやおら両手を天に向けて突き上げた。手に握られているのはタオルとオモチャの携帯電話。ときに耳を貫く鋭利な響きに耐えられないのか、再び手を下げ、しかめっ面をする。行き先不明に思われた彼女の視線は、ふと、彼女の目の前に立つ彼に注がれる。ある日の、音楽とダンスによるパフォーマンス・セッションのことである。

彼は彼女の視線に応えているのか、それを逸らしているのか、彼女が手を突き上げたのをきっかけに、やはり持ち上げられた両手を左右にゅったりと揺らし始める。それを見た彼女は同じように両手で動き出し、タオルを握った手をぶんぶん振り回して、「こう？こう？」と嬉しげに彼に訴える。なんという搖るぎない表情、たくましい笑み。次第に密度を増す音が部屋全体に充満し、彼女はさらに高揚して「ウルサイイ」と叫んで手を振り上げる。彼もまた「ウルサイイ」と応えながら、両手を上げて身体を反らしたり、屈んで全身を縮めたりすると、それに共鳴するように、彼女も上半身を左右に大きく振って応える。まるで見得を切り合う歌舞伎役者のように。今度は思わず車椅子から振り上げられた右足を、すかさず彼の左足は捉えて、二本の足が空中で出会ったまま、その邂逅を祝うように二人は両手を高くのばしてバンザイをする。絶妙の均衡を保ちながら、片足を上げた一対の身体がつくり出す交尾のポーズ。

やがて、リズミカルな運動を描き出した音楽に誘われて、彼女は、いつのまにか立ち上がり、先ほどまで車椅子にいたのが嘘であるかのように、跳ねるように全身を解き放って踊っている。いつも彼女を縛りつけている重力が、そのときばかりは彼女に力を与え、水中の魚のように、空間の密度が彼女の身体を支えている。こうして、重度の知的障害をもつといわれる彼女の身体は、見たこともない表現世界に私たちを誘い込んでいく。

ダンサーである彼は、彼女を模倣しない。模倣は動きを凝固させてしまう。模倣よりもしなやかで、刺激よりはゆるやかな、身体の呼応。眼もよだれもすべてで表現する彼女に、彼は全身全霊をかけて応じなければいけない。彼はもはや身体運動のスペシャリストではなく、表出された魂の振幅をときに広げ、ときに狭める風のようだ。風が木を揺らすのではなく、木の全身の動きが風に道を空けるように。芸術は操るのではなく、あることをあるがままに存在させるのである。

（本間直樹）

8. 協働実践の組み換え

どのような仕事や暮らしにも、慣れ親しんだ場所を移らざるを得ないことが、幾度かは訪れる。その変化の経験は、それまで難なくできていたことを難しくする。がその困難が、これまでどのように仕事や暮らしという実践が成り立っていたのかへと注意を向かわせ、はっきり自覚せずに行っていた実践に、ある輪郭を与えるかもしれないのだ。

例えば、看護師たちも働く場所が変わることがある。彼らの声を聴き取ってみると、病棟を異動することは、それまでの習慣や自らの実践の仕方を大きく揺さぶられる経験であることが分かる。彼らは、急いで新たな場所に慣れなければならず、その場で求められる援助の仕方を習得しなければならず、さらに、新しい人間関係を作っていくなければならない。その課題に立ちすくみ、自らの非力に落ち込んだり、これまでの病棟とのやり方の違いに戸惑ったり、時に、苛立つたりもする。それまでは、うまく動くことができたのに、それができない。その難しさは、いかに成り立っているのだろうか。

病棟を異動したばかりの頃は、実践の場に入り込めないばかりか、患者の状態をよく知らないことが彼らを戸惑わせ、場に入り込まないようにさせる。患者の移動や清拭などのごくごく簡単にできてしまいそうな、当たり前に行っていた援助さえも、実際にやってみるとどうやっていいのかが分からぬ。いろいろめぐらしていく手がかりが見えないために、一人ひとりの患者の状態が意味を持って現われない。病棟の皆が暗黙に了解していることや状況を理解するための判断の流れを分かち持つことができない。自分が大切にしてきたことが実践できないのだ。

これらを経験して分かるのは、病棟での実践は個々の看護師の技能に還元できるものではないことだ。自分の考えや動きは、患者の状態に応答しつつ、その応答でもある他のメンバーの判断や動きに促されて定まる。つまり看護実践は、患者の援助を柱として、病棟のメンバーとともに作り出されているものであり、メンバーの実践を継承して次に繋げていく「協働実践」として成り立っている。各自のこだわりも、その中で生きている。さらに、病棟異動は、異動した者が新たな場の仕方を習得する機会に留まらず、病棟という現場が新らしいメンバーを受け入れつつ、この「協働実践」を組み換えて新たな実践を作りだしていく機会でもある（西村 [2011]）。『現場力』は、こうした力動性の生起そのものとして記述され得る。

西村ユミ（2011）「看護ケアの実践知——「うまくできない」実践の語りが示すもの」『看護研究』44(1) : 49-62.

(西村ユミ)

9. 「引っかかり」の経験がもたらすもの

経験を積んだ看護師たちに実践を問うてみると、「引っかかり」続けたまま、数年経っても「重たくのしかかっている」「未解決な課題」とされる経験が語られることが多い。自分たちの思い込みで判断していないか、患者の話をしっかり聞けているのか、このタイミングでのこの判断で良かったのか等々。このような経験は、どの現場で活動する者にも、一つや二つは思い当たるだろう。この「引っかかり」は、私たちの経験にいかに組み込まれ、今の実践に関与しているのだろうか。

例えば、ある看護師は、ごくごく日常的に行っている患者の家族への依頼が、その家族を怒らせ傷つけてしまったこと、そしてその怒りに自分自身も傷ついてしまったことを語った（西村〔2007〕）。別の看護師は、ある患者の担当としてその人を訪問するたびにじっくり話を聴き苦しみの緩和に努めてきた。しかし、その苦しみに手が届かないまま、患者は亡くなってしまった（西村〔2008〕）。いずれも、語り手にとって、「ずっと自分の中で残っている」辛い経験である。

しかしこれらの経験は、単に、辛く消化できないこととして、彼らに重たくのしかかっているだけではない。前者はこれを語りつつ、自分たちにとっての当たり前の判断や日常の繰り返しにもなっているルーチンの実践のあり方を問い合わせようとする。後者は、自分なりに一杯援助をしたにもかかわらず、何もできていなかつたかもしれない、もっと何かすることがあったのかもしれない、と自問し、今でも心残りでたまらないと言うが、他方でこの問い合わせは、今かかわっている患者のケアにも組み込まれる。「ちゃんと（この患者の）話が聴けているのか」「一緒にこの場に居れているのか」と。つまり、過去の消化できていないように見える経験は、他の患者の今のケアに埋め込まれる可能性をもつ。

「引っかかり」は、しこりのように残り、何度も想起され、経験した者を辛い気持ちにさせる。が同時に、自らの実践を問い合わせ、他の可能性をめぐらし、現在や未来の実践に組み込まれて活かされてもいる。だから彼らは、こうした経験を「すごく変わるきっかけ」「自分のもと」とも意味づけるのだ。この問い合わせは、解決が急がれていないからこそ「引っかかり」続け、ずっと考えられている。この「引っかかり」が、協働実践を介して他の看護師たちの実践にも分かれ持たれているのであれば、一人の経験は、「現場」そのものの成り立ちに関与しているとも言える。

西村ユミ（2007）「〈動くこと〉としての〈見ること〉——身体化された看護実践の知」石川准（編）『身体をめぐるレッスン3——脈打つ身体』岩波書店：127-152。

西村ユミ（2008）「ケアの意味づけに立ち会う——メルロ=ポンティの視線に伴われて」『思想』11：183-199。

（西村ユミ）

10. 技術の答え

僕は介護の仕事をしている。僕の職場では、職員数人で「介護技術の勉強会」を開いており、それには外部の介護職の方も参加されている。

そこでは主に寝返り介助や立ち上がり介助、移乗介助などを教えているのだが、そこでよく聞かれる質問に「片麻痺で関節を痛がる人の移乗ってどうするんですか?」「立ち上がりや移乗の際、怖がる人に対してはどう介助したらいいですか?」などといったものがある。介護される者を操作可能な対象とみなす思考に焦点化された質問だ。この質問には前提として、どんな相手をも介護する者の思い通りに出来る、どんな場面にも対処し得る「万能の技術」が想定されており、教える側の僕らはそれを「答え」として求められる。そこに含意されている老人像（介護される者）はあくまで介護する者にとって規定内の人であり、それ以外の老人像が入り込む余地は残されていない。

そんな質問に対して、僕は「こんなやり方もありますよ」といって一応の「答え」をやってみせるのだが、その一方で「技術のやり方を身に付けたからって、それがそのまま通用するほど生身の人間って単純じゃない・・・。」といった相反する思いが実感として胸を過ぎるもの確かだ。技術の方法を「答え」として教えながら、その枠外に置かれた人のことが頭から離れず、ジレンマや矛盾に葛藤しながら、「伝えられること」と「伝えきれないこと」の狭間で、そこに潜む事柄がやけに気になる。こちらのやり方に一方的に相手をはめ込む思考では現場には留まれない、そんな思いが消えないのだ。

触るだけで「ギャーッ」と叫ぶ女性の抗う姿。願いを伝えきれない失語症男性の背中に滲むやりきれなさ。全身の痛みを訴える女性の強烈な拒み。夫の墓前で手を合わせる老女の無言の涙・・・。

相手の身体から放たれる息づかいに既存の技術では近づけない。手持ちの技術が相手のふるまいによって崩される。逆に、相手のふるまいに合わせて新たに技術を創造しようとしてもその創造がどうしても追いつかず、それとは別に、相手の様相を前に理屈抜きで突き動かされる自分がいる。僕は、「技術」が簡単に揺さ振られる経験を確かにしている。

「技術」が人ととのあいだに介在するものであるならば、介護技術は介護する者が併せ持つ「する技術」であるとともに、介護される者にとっての「される技術」でもあるはずだ。人と人がまみれるその接点で、想像が及ばない出来事のその只中で、「技術」はどのような姿を見せるのか。そしてその可能性が、現場の「外」で伝達される「方法化された技術」に囚われない覚悟から生まれ、現場の「内」で「人の生きる様」として描かれるとするならば・・・。

介護技術の勉強会に「技術の答え」は見当たらない。そして僕はそれを未だ持ち得ないままである。

(安田伸行)

11. 木村敏の＜あいだ＞と絶対の他

ある国際会議の合間に、ガブリエル・マルセルと芝生に寝そべって語りあった時のこと。木村は次のように回顧している。木村〔2009a〕は最初「Zwischen」というドイツ語で自分の考えを説明しようとしていたが、マルセルは「間柄」という意味にうけとったのか話に乗ってこなかった。そこでふと「Vorzwischen」（あいだ以前）という表現に言い換えてみたらマルセルは大いに興味と共感を示してきたと。

このエピソードが示すように、木村の「あいだ」とは二つのものの間ではなく、それ以前の根源的「メタ・ノエシス原理」〔2009b〕として提起されたものだ。その根源的「あいだ」が、水平面では自己と他者（患者）との「あいだ」として、垂直面では自己と自己の根拠との「あいだ」として、ふたつの「あいだ」が等根源的に生起していく。他者との関係論が脚光をあびる今日、自己論を抜きにしては「絶対に駄目」という木村の現象学的精神病理学の立場がここから生まれている。

ところで、この根源的「あいだ」はハタラキとしての「こと」であって「もの」ではない。しかしそれについて語ろうとするときどうしても「もの」化せざるをえない。自己と他者との根拠として何か第三の「もの」のような扱いとなるのが宿命といってよい。そのとき根源としての根拠は「絶対の他」と呼ばれ絶対者のような位地づけになる。「長安一片の月、万里相隔てて看る」の月の役割にある。他方、そのような根拠は、何「もの」でもない根拠、何「もの」でもない媒介だから、この局面で言えば月は消え去り、ストレートに自己にとっての他者（患者）が「絶対の他」となり、相互に「絶対の他」同士の関係となる。木村が「絶対の他」というとき、このような二局面があり、それは西田幾多郎の「絶対の他」にもみられる二重性で、木村はそれをうけついでいるといえる。

木村の「あいだ」という思想は、自己と他者とを超越する絶対者を外にたてる（キリスト教的な）宗教と、自己と他者を「唯仏与仏」として絶対の関係ともみなしうる（大乗佛教的な）宗教という、形としては一見異質な宗教のあいだに通底するそのもとを掘り起こしたもので、諸宗教間の相互理解に有意義な視点をひらいている。それを木村は臨床治療の現場から自覚にもたらしたものだけに、具体的な人間関係の現場と宗教的次元との連関を解きほぐすに大変示唆的なものといえるだろう。

木村敏・杉村靖彦（2009a）「対談・臨床哲学」『文明と哲学』日独文化研究所年報第2号。
木村敏・檜垣立哉（2009b）『生命と現実—木村敏との対話一』河出書房新社。

（小林恭）

12. <生命／人間的生／いのち>と生命論的差異

教育の現場で悪質ないじめや自殺などの事件が発生するたびに、校長、教育委員会のコメントには「いのちの大切さを教えることを徹底させたい」という言葉が現われる。子どもたちは、大人たちの現実の社会とひきくらべ、言葉のそらぞらしさを感じていよう。自分の子どもの自死という体験をへて高史明 [1980] は現代を「いのちの私物化、いのちの見失い」の時代と呼ぶ。教育責任者たちのコメントはむしろ「私たちこそいのちを見失っていて相すまぬことでした」とあるべきではないか。

上田閑照 [2007] は<生命／人間の文化的生／いのち>という区別を提案し、現代を<いのち>へのセンスを見失ったことすら見失しない、文化的生のレベルが異常肥大をきたし歯止めのきかなくなった状態と表現する。上田が<いのち>ということばで指し示そうとすることを、木村敏 [2005] は<ゾーエー>とよび、死ねばなくなるとみなされる生きものの生命<ビオス>との区別をたてる。それはケレーニーおよびヴァイツゼッカーから想を得たものという。木村は「生死の区別以前の生即死、死即生の潜勢態」 [2009] とそれを言語化し、ビオスとゾーエーの区別を「生命論的差異」と名付けた。

彼の<あいだ>の概念の場合と同様、ここでも<ゾーエー>を語るにあたって、それが絶対的根拠なるものとして容易に「もの」化されてしまう危険がともなう。それをふせぐのは、「生命論的差異」を意識対象としてのAとBとの差異のごとく「もの」化しないことだろう。私がビオスあるいは単なる生存を<いのち>と取り違え、<いのち>を見失っていたという、身に滲みての反省的気付きのハタラキに即してのみ感得すべきもので、「差異」とはそのような動性でなければならない。上田は<いのち>を直接対象とする学問はあり得ないと言う。

現場に関する学（看護学、教育学etc.）は、<いのち・ゾーエー>の問題（スピリチュアルという語でそれを扱おうとする場合もある）を安易に方法化したり体系化したりすべきではないだろう。その問題をあくまで学の外部のこととしたうえで、その外部に常に開かれた用意を保持するというスタンスが望ましいと、現在の筆者は考えている。なぜなら「見失っていた」という気付きと相即してはじめて<いのち>の自覚が成り立つとすれば、人間の文化的生の一環である学の立場は、何よりも見失いの自覚をつねに踏まえなければならないであろうから。

高史明（1980）『深きいのちに目覚めて』彌生書房.

木村敏（2005）『関係としての自己』みすず書房.

木村敏（2009）「生命・身体・自己」『文明と哲学』日独文化研究所年報第2号.

上田閑照（2007）『哲学コレクション1・宗教』岩波書店.

(小林恭)